

取り返せないことを取り返す

大江健三郎氏は、朝日新聞に「定義集」というコラムを時々書いていますが、2009年4月21日朝刊のこのコラムに掲載された《【取り返せないことを取り返す】同世代、通い合う「せりふ」》には、私の共感を誘うものがありました。また、この文章に触発されて、いろいろと思うところがありました。

大江健三郎氏は、私と同世代の人で、私が1955年(昭和30年)に東大教養学部に入學したとき、大江氏は1年上の学年に在學していたはずですが、しかし、彼は文科2類(現在の文科3類に相当)、私は理科1類の学生でしたから、知り合うことはありませんでした。ただ、当時彼が学内誌に何かを書いていたという記憶が私にはあります。大江氏は、文学部仏文学科卒業とほぼ同時に芥川賞を受け、作家への道を歩み出したことはよく知られています。

上記の「定義集」の内容を簡単に言えば、大劇作家であった木下順二氏の、「どうしても取り返しのつかないことをどうしても取り返すために」書かれた戯曲やエッセイ、更には井上ひさし氏の近作戯曲と、大江氏自身の言葉によれば「老年の」大江氏自身の思いを重ね合わせたものです。

この定義集の文章の中に、木下順二著「忘却について」から次の文章が引用されています。『(前略)私たちは、忘れてはならないことを実によく忘れる。あるいは忘れてしまおうとしたがる。そしてその忘

却の罪と誤りに気がつくのは、しばしばほとんど取り返しがつかなくなった時にであるようだ。』ある程度以上の年齢の人は誰も、この文章に思い当たることがあるはずです。これを書いた木下順二氏の代表作である「夕鶴」が様々な形で上演されて、多くの人々の心を打ったことは当然だったと思います。

忙しい毎日を送っている現代人には、忘却は当たり前のことになっています。思い出したくないことを本当に忘れてしまうことは、その人にとって幸せだとも言えるかもしれませんが。そのような中で、忘れないでいても、時の流れが私たちを否応なしに取り返しのつかないところにまで運んでしまうこともあると思います。私自身に関しては、このような場合の方が多いと思えるのですが、それは単に、自分の記憶力を過信しているということなのかもしれません。

私は、教育と研究をする職に就いて、長い間忙しくしていましたが、その中で、こういうことをしてみたいと思いながら、実際にはできなかったことが数え切れないぐらいあったというのが実感です。それらは取り返せないことなのですが、自由に使える時間が多くなった今、それらをできるだけ取り返す努力をしようと思っています。しかし、全ての事象は時間の関数なので、完全に取り返すことは絶対にできないことはよく分かっています。時間は一方向にしか流れません。残念ながら、こればかりは何ともできません。

今の私の第一の関心は、読もうと思って
いたが読んでいない本を読むことです。本
を読んで、若い時ならば簡単に分かったと
思えたはずのことが、今ではそうでないこ
ともありますが、逆に、若い時の分かり方
は十分でなかったのではないかと思えるこ
ともあります。読む対象が文系の本の場合
には、明らかに今の自分の方が理解力の点
で昔の自分を上回っていると思います。こ
れは「亀の甲より年の劫(功)」のお蔭です。
理系の本の場合は、そう簡単ではありません
が、時間を十分にかけることができる今
の方が、広く深く把握することができるか
もしれないという期待感を持っています。

理系の本、とくに物理学関係の本を読む
場合は、数式を理解して計算もしなければ
ならないことは当然ですが、必要な数学の
記憶は段々に取り戻せるように感じていま
す。大学に入学したあとの1年半ほどの間、
私が本当に勉強したのは数学（数学者の数
学ではなくて自然科学や工学のための基礎
数学と言うべきでしょう）だけだったと思
っているのですが、これが今になって役に
立つことは嬉しいことです。私は、本来数
物系の学科に進むべき理科1類の学生でし
たが、とりたてて数学ができるわけではな
いという自覚があって、大学受験のためと
同じぐらい一生懸命に、微分積分やベクト
ル解析、はたまた数理統計学の演習問題に
取り組んだものでした。

自分の心身の状態が何時まで今と同等の
水準にあるかが最大の問題ですが、健康が
続く限り、勉強を続けて、取り返すという
よりも、新たな知識をしっかりと自分のも
のにしたいと思っています。何のためにそ
んなことをするのかと問われれば、そうし
たいからと答えるしかありません。ヒラリ
ー (Edmund P. Hillary) が、「エヴェレス
トがそこにあつたから登った」と言ったの
と似たようなことだと思えます。（おわり）